

埼玉親善大使レポート

氏名：廣瀬健太郎

留学先大学 シンガポール 南洋理工大学

活動報告

このたび、令和6年8月より約1年間、シンガポールの南洋理工大学（Nanyang Technological University, 以下 NTU）に交換留学の機会を頂戴し、環境と持続可能性を主題とした学術的・実践的な学びを深めてまいりました。本報告書では、特に履修した「Environmental Sustainability」および留学中の生活と埼玉県のPRの際に実施したことを中心にご報告申し上げます。

1. シンガポールという国

シンガポールは、東南アジアに位置する小さな島国で、マレー半島の先端にあります。

面積は東京23区ほどとコンパクトながら、人口はおよそ570万人と高密度で、都市機能が集中しています。英語、中国語、マレー語、タミル語の4言語が公用語とされ、多民族・多文化の社会が形成されています。天然資源に乏しい一方で、人材育成や海外企業の誘致に積極的であり、貿易や金融を中心に経済発展を遂げてきました。国際的なビジネス拠点として高い評価を受けており、世界中の企業や研究機関が集まっています。また、水資源の少なさを克服するため、再生水（NEWater）や海水の淡水化など、独自の先端技術を活用しており、環境・テクノロジー分野でも注目される国です。



2. 授業受講「Environmental Sustainability」

まず、NTUにおける「Environmental Sustainability」では、地球環境が直面するさまざまな危機を学際的に捉え、持続可能な社会の実現に向けた理論と実践を学ぶ内容となっていました。講義は環境社会学、政治経済学、グローバルガバナンスなどを背景に、環境問題の構造的要因を深掘りしつつ、具体的な対策や制度設計の可能性を探るものでした。テーマは地球温暖化や資源枯渇、水資源管理など多岐にわたり、理論と現実の両面から課題を検討しました。その中でも、私が特に関心を持って学んだのが、シンガポールにおける水資源政策の中核を担う「NEWater」プロジェクトです。シンガポールは水資源に乏しく、長年にわたりマレーシアに水を依存してきた歴史があります。NEWaterは、下水処理水を高度に再処理し、工業用水として、また必要に応じて飲料水として供給する先進的な再生水システムです。特に印象深かったのは、再生水に対する“心理的な壁”を打破するた

めの教育・啓発活動です。NEWater は単なる工業製品ではなく、「飲める再生水」として国民に信頼されるブランドとして確立されています。小学校教育から始まる水リテラシーの普及、市民見学施設での参加型ワークショップ、大統領が実際に水を飲むことで安全性をアピールする広告など、多角的なアプローチを通じて「水のストーリー」が語られ、市民との信頼関係が築かれているのです。これは、技術開発が先行しがちな日本においても、大いに参考となる戦略だと感じました。さらに、災害脆弱性に関する講義では、「災害は自然現象ではなく、社会構造と密接に関わっている」という視点が提示されました。つまり、同じ災害でも、都市構造や貧困、行政体制の違いにより被害の大きさは大きく異なります。水資源の不足や水質汚染もまた、単に技術で解決すべき問題ではなく、制度設計・教育・市民意識といった広範な要因との関係性を理解することが不可欠であると感いたしました。

3. 留学中の課外活動

留学期間中は、学業に加えて課外活動にも積極的に取り組みました。特に力を入れたのが、時事討論部（Current Affairs Society）およびバスケットボール部・サッカークラブでの活動です。「多様な分野への挑戦」をテーマに、自身の関心を広げることがを心掛けて行動いたしました。時事討論部では、移民政策をテーマにプレゼンテーションおよびディスカッションを行い、その準備の一環として、現地のボランティア活動に参加する機会も得ました。孤児支援やメンタルヘルス支援に関わる中で、シンガポールという国が抱える社会的課題や、統計データには現れにくい側面を実感し、自身の視野を大きく広げる貴重な経験となりました。また、スポーツ活動を通じては、多文化環境での協働の難しさと面白さを体感しました。バスケットボール部やサッカークラブでは、日常的に英語と中国語が飛び交っており、戦術の打ち合わせ中に言語が突然切り替わることも頻繁にありました。そのため、当初の目標であった英語力の向上に加え、中国語の学習にも意識的に取り組むようになりました。競技を通じて共通の目標に向かって努力する中で、国籍や文化を超えた密度の高い交流が実現し、非常に充実した時間を過ごすことができました。



4. 留学中の文化交流

文化交流面では、できる限り多様な国籍の留学生と交流することを意識し、国際的な視野を広げることを目指しました。私が所属していたグループには、アジア圏からの留学生は私一人で、その他は欧米の学生が多く、それぞれ異なる文化的背景や価値観に触れる貴重な機会となりました。

日々の食事時間など、形式張らない場面での会話を通じて、各国の学生と率直な意見交換を行いました。特に政治や経済に関する話題は、シンガポールでは日常的に議論されており、日本ではあまり踏み込みにくいテーマもオープンに語られていたのが印象的でした。こうした対話を重ねるなかで、自国のあり方を他国の目線から見つめ直す機会にもなり、自分自身の内面においても大きな成長を感じることができました。



5. 埼玉県親善大使としての活動

埼玉県親善大使としての活動にも力を注ぎ、主に二つの取り組みを行いました。

一つ目は、各国からの交換留学生が自国を紹介するイベントにおいて、埼玉県のPRを行ったことです。イベントでは、埼玉県の地理や観光名所、伝統文化や名産品について紹介し、県の魅力を直接海外の学生に届けることができました。中でもアニメ「ワンパンチマン」の影響により、思いのほか多くの学生が「埼玉」という名前を知っていたことに驚きました。アニメ文化の国際的な影響力を実感すると同時に、それをきっかけに埼玉県に興味を持ち、観光名所やグルメについて積極的に質問してくれる姿勢が嬉しく、非常に楽しい交流となりました。



二つ目は、大学の授業内で自分の出身自治体について紹介する機会があり、埼玉県についてプレゼンテーションを行ったことです。この授業には、日本への留学を予定している学生も含まれており、埼玉県に対する関心も高く、狭山茶の試飲を交えながら説明することで、具体的かつ印象的な紹介を行うことができました。特産品などの「実物」を用いた発信は、地域の魅力を効果的に伝えるうえで非常に有効であると実感しました。

6. おわりに

この留学を通じて、語学力の向上にとどまらず、異なる文化・価値観との接触を通じて精

神的にも大きく成長することができました。また、埼玉県魅力を海外に伝える活動を通じて、改めて自分の故郷への理解を深め、日本という国の良さを再確認する機会にもなりました。

今後は、留学で得た知見や経験を、国内外のさまざまな場面で活かしながら、埼玉県や日本の魅力を引き続き発信してまいりたいと考えております。そして、多様性を理解し尊重する姿勢を大切にしつつ、今後の社会に貢献できるよう、努力を重ねていく所存です。